

仮名字考

金川 寿治

(1) 仮名の創成

わが正史にあらわれた漢字の伝来は、神功皇后の三韓征伐後、即ち応神天皇の16年(285)と伝えられる。しかしそれ以前、わが国と朝鮮および漢土との間に往来があり、文字学問等の伝来をうかがい得る資料がある。

この点について、わが文献には徴すべきものがないが、中国の文献によると、わが九州の豪族と、後漢や魏国との間に、互に交通したことが記録されて居り、その間、漢字の伝来と認むべき事項がうかがえる。

天明4年(1784)筑前国糟屋郡志賀島叶崎の土中から、篆書の白文で「漢委奴国王」と刻した金印が発掘された。後漢書に徴すると、これは光武帝が中元2年(57)に委奴国(北九州の豪族)の使者に授けた印綬に該当し、王仁の来朝より200年以上も以前であり、この頃既に漢字がわが国に伝わっていたと考えるべきである。

漢字伝来の当初は、極めて一部の上層階級の間にもみ使用されていたが、奈良時代に入り、仏教の隆昌に伴い写経が流行し、また風土記の撰進等により、漢字の普及は漸く全国的になった。

しかし漢字はもともと他国の文字で、これによってわが国語を記述するには非常な不便を感じた。ここに漢字をそのまま使用し、その本来の用法でなく、音を借り且つ訓をも交えて、漸く国語を書くようになった。即ち万葉仮名の発現である。しかしその借音の煩雑さと、漢字の繁画の不便さは非常なものであった。

平安時代に入りこの不便さを克服して創成されたのが仮名である。即ち漢字の一部分をとり一字一音の記号とし、ほぼ理想的境地に達したのは片仮名であり、また万葉仮名が著しく草変省略されて変体仮名や平仮名が生じた。

片仮名、平仮名は共に漢字を始祖としてはいるが、完全な音符文字に生れかわり、わが国語を写すに最も適している。この新日本文字の出現によって、その後のわが国文化が著しい進展を遂げて来たのである。

仮名の創成は、実にわが国民性の自主的精神および創造力の顕現であって、わが国文化史上、および書道史上特筆大書すべき事柄であり、われ等祖先の遺した一大偉業である。

(2) 仮名の名称

仮名の語源は、漢字を「^{まんな}真字」と呼ぶに対して「^か仮りの名」の義であるといい、また他説には梵語の「カラナ」即ち「文字」の義であるともいわれている。

現在の学者の多くは前者の「仮りの名」即ち「かりな」が音便で「かんな」となり、更に約して「かな」となったと説いている。

補)

梵語々源説

新井白石は、その著「東音譜」に於て「五十の母子は蓋し悉曇章に本づく」と述べ、

且つ「ン」は確かに梵字より来たものであると立証している。多分五十音図は梵学研究の僧侶の手になったものであろうというのが今日の通説であるが、この五十音図の作成と仮名語源とを結びつけんとしたのが梵語々源説と思われる。

(3) 仮名の種類とその源流

	(現代名)	(古名)	(源流)
1.	片仮名	かたかな	漢字楷書の一部
2.	平仮名	^{おんな} 女 ^て 手	漢字草書の草化 変体仮名の略化
3.	変体仮名	{ 男にもあらず 女にもあらず	
4.	万葉仮名	^{おのこ} 男 ^て 手	漢字草書の略化 (原形に近い) 音標文字としての漢字の 楷・行・草体

(4) 片仮名の由来

わが国上古は、その初めはすべて漢土より渡来の漢文体を使用していたが、われら祖先の自主的精神によって、漢字をそのまま使用しその音訓を借りて、わが国語を記述するようになった。こうした書体文献の現存最古のものとしては、推古天皇の遺文中にこれを見ることが出来る。仮名発生の因も遠くここに胚胎するのであって、この記述法は奈良時代に入って古事記・日本書紀の中にも見るようになり、中でも万葉集に至ってその極に達した。

万葉集がこうした漢字の国語記述法の代表的文献であることから、この集に用いた国語記述用の漢字を総称して「万葉仮名」と称するようになった。しかしこの万葉集式の記述法は品詞とテニヲハとの区別が判然しないので、この不便を避けるために、宣命体と称する一つの新しい記述様式が生まれるようになった。

宣命とは国語で天皇の御言葉を記し国民に宣するもので、その記述様式はテニヲハに当る漢字を品詞の側に小さく記する方法で、これを宣命体といい、そのテニヲハに当る万葉仮名の煩瑣を避け簡略化されていった。これが片仮名発生のそもそも始まりである。こうした簡略記述法は、その後奈良時代末期から平安初期にかけて、漢文学の興隆、経文研究の隆昌に伴って、その和読上訓点として用いた万葉仮名は狭い字間や行間に書く関係上、次第に省画が進められ、一種の符号字体になっていった。これが片仮名で「真字」の一部分から生れたものである。その当初は勿論、後世に至るまで同音異字の文字が多数あったが、爾来实用乃至書写の便宜上から次第に淘汰を受け、長年月の間に漸次一定するようになったもので、吉備真備一人の作とする説は今日多くの学者のとらないところである。

片仮名の名称は昔から「かたかな」と呼ばれ、別に「大和仮名」「五十音仮名」とも称されている。この「かたかな」の名称が初めて文献に見えるのは、かの宇津保物語の国譲の巻および蔵開の巻の条で、以来堤中訥言物語、源氏物語、枕草紙、狭衣物語、宇治拾遺物語等に見えている。しかしこの「かたかな」は、漢字を省画してその一部分を残した即ち漢字の片体

という意で、完全なる原字に対しその片方即ち形体不完全であることを意味している。

古文書に使用されている片仮名を見ると、230余の多きにのぼっている。平安中期頃までは異体が多く、室町中期以後は大体今日の形に近くなり、江戸時代に入って古学復興に伴い仮名文字の研究も盛んになり、その字形も次第に統一されて来たが、なお「ネ」「子」,「キ」「井」等は両存していた。

現在使用のものは、明治33年(1900)小学校令を以て定められたものである。

(5) 片仮名字源

漢字を省略して用いた例は、奈良時代の文献にすでに見えているが、これは漢字として用いたもので片仮名として用いたものではない。仮名としての使用は、奈良時代末期より平安時代初期の漢文乃至経文の音訓の傍註書きに初まるのであるが、この傍註書きは、当初に於てはすこぶる秘密性を有したもので、師伝を尊重したため、その字源となった漢字もいろいろあり、同一漢字でもその省略の部分によって、それぞれ異体の文字が出来た。

一般に仮名の字源に異説が多いのも、こうした秘密性に起因することが多い。

片仮名の大部分は漢字の一部を摘出して作成したものだが、簡単なる字源はその全部をとり、あるいは草書体より省略したものなどもあって、長年月の間に適者生存の理によって漸次一定して来たものである。

ア……「阿」の扁の省略

イ……「伊」の扁をとる

ウ……「宇」の冠をとる

エ……「江」の旁をとる

オ……書写体の「於」の扁をとる

カ……「加」の扁をとる

キ……「幾」の草変の一部(喜の頭部, 起の扁頭部, 規の扁変)

ク……「久」の一部をとる

- ケ……「介」の省変（介の変，気の頭部，計の草変）
 コ……「己」の上部をとる
 サ……「散」の一部（蔵，草，薩の冠，莽の下部）
 シ……「之」の草変したもの（津の扁，氏，此の省変）
 ス……「須」の終部をとる
 セ……「世」の変化したもの
 ソ……「曾」の上部をとる
 タ……「多」の上部をとる
 チ……「千」の全画（知の省変）
 ツ……「川」の全画（州の一部，通の頭部，爪，囟，鬥の省変）
 テ……「天」の一部をとる
 ト……「止」の上部をとる
 ナ……「奈」の一部をとる
 ニ……「二」の全画（仁の旁）
 ヌ……「奴」の旁をとる
 ネ……「禰」の扁をとる
 ノ……「乃」の一部をとる
 ハ……「八」の全画（半の一部）
 ヒ……「比」の一部をとる
 フ……「不」の一部をとる
 ヘ……「反」の一部をとる（辺の一部，部の旁，閉の草体の冠）
 ホ……「保」の右下部をとる
 マ……「末」の上部をとる（万の草体）
 ミ……「三」の全画（美，尾の三横画）
 ム……「牟」の上部をとる
 メ……「女」の一部をとる（妙の最後の二画）
 モ……「毛」の省略
 ヤ……「也」の省略

- ユ……「弓」の一部をとる
- ヨ……「與」の一部をとる
- ラ……「良」の一部をとる
- リ……「利」の旁をとる
- ル……「流」の終部をとる
- レ……「礼」の旁をとる
- ロ……「呂」の上部をとる
- ワ……「和」の一部をとる（回の省略，輪の右下部）
- キ……「井」の全画（韋の下部）
- エ……「慧」の書写体の一部
- ヲ……「乎」の省略
- ン……源字不明（白石説によれば梵字）

(6) 平仮名の創成およびその発達

片仮名が万葉仮名の楷書体より省略脱化して、主として男子の間に発達進化している間に、同じく万葉仮名の繁を避けて簡易に従うべく、その草体より自然に省略されて、主として女子の間に発達したのが平仮名である。おおむねその進化の過渡期、すなわち草書体と平仮名との中間にあるものを普通に変体仮名といい、この平仮名と変体仮名の二者を総称して、別に草仮名という。

平仮名の名称は古いものにはない。創成期から江戸時代の初期までは、みな「女文字」「女手」といったようである。土佐日記や字津保物語などには、この名称が見えている（紀貫之が土佐の任から都に帰る時、日記を仮名で書くところを憚って「女もしてみむとてするなり。」といて、自己を女の如く装うてさえている。）が、平仮名という語は見受けられない。平仮名と呼ぶようになったのは江戸時代元禄以後のことで、平易なる仮名、普通の仮名の意味でかくというようになった。

この平仮名の創成者を、普通空海というが、今日の通説では片仮名と同様、長年月の間に、自然に多人数の手によって発達進化したものであろうと

されている。空海は書道の大家でもあり、「いろは歌」と共に平仮名の成立にも、多大の貢献をしたことであろうと思われるが、平仮名の創成を空海一人の手に帰するのは当を得ない。

片仮名が漢文の間に於て、男文字として発達したのに対し、平仮名は和文の間に於て、「女文字」「女手」として女性の間で発達した歴史的経路から平仮名の創成者は女性であると考えべきである。平安初期漢文学の隆昌時代に於て、女性は漢文に手を触れしめなかったため、自然国文の世界にとじこもらなければならなかった。従って女性は漢字を漢字として書く機会に恵れなかったから、漢字の字画に拘泥したり顧慮する必要もなく、自由に大胆に、それぞれの趣味にまかせて書いたであろうと思われる。

こうして平仮名は女性の手によって作られたが、連綿遊糸の美を發揮したいわゆる上代様仮名の完成は、平安中期に入り多くの男性の努力も加わって、出来たものと考えられる。

それは現存する上代様名筆の筆者の多くが伝男性であることから窺えるのである。

平安朝は情が他の知や意を越えて、社会を支配した時代である。情から發するものは美の追求である。新しく作り上げられた草仮名はこの趣致をうけ、漢字の豪宕雄偉、謹嚴方正な態度を捨てて、優雅典麗、繊細巧緻な姿となり、しなやかな美しい、暖かい情趣を遺憾なく發揮するようになった。

草仮名の曲線美は、当時の情趣を盛るのに最も適合していたから、遂には一般的に使用せられるようになり、ことに私的性を帯びたものは、大抵これによって書写せられたようである。しかし延喜頃にはまだ草仮名の特色として認めらるべき春蚓秋蛇の態、連綿遊糸の趣は、殆んどあらわれていない。紀貫之の書は詳にし得ないが、藤原定家の臨摸によって見ると実に古拙で、草書の体を離れることがまだ遠くなく、連綿遊糸の趣が殆んどあらわれていない。老蒼であり高古ではあるが、佳麗でなく、雅馴でない。

天曆期に入っても連綿遊糸の草仮名は未だ完成を見なかったようである。小野道風の草仮名は、伝うるところ多くして、実は詳にし得ない。ただその

消息について窺うに漢字草体を悉く脱し得ず、貫之のように老蒼であり高古であり、しかも朴実である。ただ古拙の風が著しく減じて巧緻の趣がすでにあらわれているが、流暢優美の風は未だ見られない。

天曆以後になって平安文化の特色は鮮かに現れて来た。これは彫刻、建築、絵画、音楽等諸芸術の上には云うまでもなく、輿車、器玩、服飾、調度に至るまで、すべてが旧来の中国様式を脱し純然たる日本様式になった。いわゆる艶にあえかなる、妙にをかしき、優にやさしきのみでは足りない。厭味のない艶やかさ、あくどくない美しさ、締のある柔らかさ、臙ろなる明らかなさ、張りのある撓やかさはこの時期から著しく見えて来た。

道風に次いであらわれた藤原佐理は、三島の神までも額の揮毫を依頼したというほどの名手であるが、その漢字のみを伝えて草仮名が殆んど残っていない。伝佐理の古筆はいずれも佐理以後の人の手になったものと断ぜられる。ただ一つ賀歌切は絹地に書いたものであるが、老健蒼古の趣を遺憾なくあらわし、道風の秋萩帖におのずから通ずるところがある。これを佐理の真と断ずることは早計であるが、それに極く近い時代の能筆者の手になるものと考えられる。ことにその歌が拾遺集のものであることから、その当時か或はや離れた時の書写と推せられる。即ち佐理か或はその附近の能筆書は、道風の草仮名の筆致をうけて、また一種の趣を出したのである。

藤原道長は精密に日記を認め、その後継者がまたよくこれを保存して、今日に至っているので、その詳細を知ることが出来る。当時の習慣として日記の書写はみな和習のある漢文体である。従ってある所は漢字のみで、草仮名は殆んどない。草仮名の比較的多くあるのは、子の頼通を春日の使に立たせた条にある歌の部である。それによると、各字まだ独草の風を脱せず、連綿の趣はただ僅かにあらわれているに過ぎない。万葉仮名も交えられて筆致勁健ではあるが、古拙の風が多く宛転繚繞の致には頗る遠いところがある。これを伝佐理の賀歌切に比し、遡って道風の情報中の草仮名に比し、さらに遡って定家臨の貫之の草仮名に比すると、階級はいくつもあるが、一脈相通ずるものがある。即ち漢字の草体を脱すること遠からず、各字が孤立的であっ

て連続的でなく、各行が密集的で散佈的な巧妙さは少しも見出せない。各字、各行おのずから修め、おのずから整って相倚り相助けて全体の統一を図ることをしてない。

道長と同時代の人に藤原行成がある。行成が清少納言に送った消息を中宮が「めでたくも書かれたるかな。をかしようしたり。」とおほめになってお取上げになったと云われるほどの書の名手である。貫之、道風、道長と一系をなすものとすれば、その間に時代と共に多くの変化があったであろうが、すべてに於て旧様である。貫之の古拙で、漢字の独草体を多く離れぬもの、道風、佐理の新様ながらなお草体を保持しているのに次いで、道長も大体に於て同じ趣致、同じ姿態を襲用している間に、行成は一新様を出したのである。

行成の草仮名の真はいまだ確認し得ない。しかしその真と考えられる白氏詩巻、またはこれに準ずる親王位記草案、本能寺切、関戸氏蔵消息から推すと、原氏、関戸氏蔵の朗詠は、その真か、またはそれに近似するものと思われる。とすれば、それに附記せられた草仮名は、その真か、それに酷似するものであらねばならぬ。それらを見ると、形態は著しく整齊で、偏欹がなく、豊満であり、雅馴であり、品位が高く、姿態がよい。ことに各文字の連続は、従来あまり多くの注意が払われず、ただ筆の赴くままに任せていたのに反して、意を用いて連絡せしめ、左右の均衡、前後の調和を考えて、二字三字にして一字の勢、一句にして一字の体、更に一行にして一字の意を寓せしめ、全体の整頓を以て念とし、統一を以て理想としている。これがため連綿遊糸の体が完全に出来上って、従来範とした中国になく、またわが国にも存しない新しい日本様式を創始したのである。源氏物語に旧様の教育を受け、旧様の生活をしている末摘花の君は、「御手はさすがに文字強う、中さだの筋にて上下ひとしく書」かれたという。当世人の源氏の君は、この故に「見るかひもなううち切」かれたのである。その源氏の君は「万づのこと昔にはおとりぎまに浅くなりゆく世の末なれど、仮名のみなむ、今の世はいときはなくなりたる。古きあとは定まれるようにあれど、広き心豊ならず、

一筋に通ひてなむありける。妙にをかしきことはとよりてこそ。」と云って旧様の非難者、新様の讚美者である。まことに旧様にくらべると、根底はそれにあるにしても、著しく流暢、甚だしく優麗であって、連綿遊糸の草仮名は、行成を中心とする寛弘期に於て完成を見たものと考えられる。

平仮名も長年月にわたり、多人数の手により、多数の字が漸字成形されたものであるから、その数は350余の多きにのぼる。現在使用のものは明治33年(1900)この中から採用されたもので、他の平仮名を普通変体仮名と呼んでいる。

(7) 伊呂波歌

いろは歌は、仮名手本として凡そ800余年の永い星霜を経ている今様歌である。いつの頃からか、これを7字ずつに切って読み書きするようになり、従って歌の意味も忘れがちとなったのであるが、これは元来「涅槃経」巻13聖行品の4句の偈「諸行無常是生滅法生滅々已寂滅為楽」を同字なしに意識したものであると伝う。

諸行無常………色は匂へど散りぬるを
 是生滅法………我が世誰ぞ常ならむ
 生滅々已………有為の奥山今日越えて
 寂滅為楽………浅き夢見じ酔ひもせず

いろは歌の作者については、古くから空海説と非空海説との二説に分かれている。

卜部兼方著「釈日本紀」 頓阿著「高野日記」 藤原長親著「倭片仮字反切義解」 四辻善成著「河海抄」 契沖著「万葉代匠記」および「和字正濫抄」 伴信友著「仮名の本末」 高野辰之著「日本歌謡史」は空海説を述べ 黒川春村著「碩鼠漫筆」 榊原芳野編文部省刊行「文芸類纂」 大矢透著「音図及手習詞歌考」は非空海説を述べている。

(8) 平仮名字源

平仮名字源も、古来諸説あって判然しないものもあるが、大体「同文通考」に従う。

(平仮名字源)

(万葉仮名)

い……「以」の草変	移, 伊, 以, 異, 怡, 易, 射, 意, 夷
ろ……「呂」の草変	路, 楼, 露, 慮, 婁, 論, 魯, 侶, 漏
は……「波」の草変	八, 半, 盤, 破, 葉, 頗, 者, 芳, 婆, 播, 判
に……「仁」の草変	耳, 仁, 二, 爾, 丹, 兒, 干, 荷, 邇, 柔
ほ……「保」の草変	本, 宝, 報, 保, 穂, 奉, 褒, 煩
へ……「部」の旁又は「皿」 「辺」「反」の一部	遍, 返, 辺, 弊, 倍, 経, 陪, 篇, 変, 辨
と……「止」の草変	登, 等, 東, 斗, 度, 砥, 凶, 騰, 土, 杜, 渡, 刀
ち……「知」の草変	知, 地, 馳, 遲, 千, 致, 稚, 茅
り……「利」の草変	利, 里, 李, 離, 梨, 理, 隣
ぬ……「奴」の草変	奴, 努, 怒
る……「留」の草変	流, 留, 累, 類, 璃, 屢
を……「遠」の草変	遠, 越, 乎, 緒, 雄, 尾
わ……「和」の草変	和, 王, 倭, 輪, 吾
か……「加」の草変	可, 歌, 賀, 香, 我, 駕, 荷, 閑, 家, 嘉, 鹿, 佳
よ……「与」の草変	与, 夜, 世, 余, 代, 用, 容, 四, 遙, 餘
た……「太」の草変	多, 堂, 他, 当, 駄
れ……「礼」の草変	礼, 麗, 連, 例, 列, 烈, 黎, 戾
そ……「曾」の草変	曾, 楚, 処, 所, 蘇, 祖, 其, 増, 素, 存, 叙
つ……「川」の草変又は 「門」「州」の草変	都, 徒, 豆, 津, 通, 途, 頭
ね……「禰」の草変	禰, 年, 念, 寝, 根, 音
な……「奈」の草変	奈, 那, 南, 難, 莫
ら……「良」の草変	良, 羅, 楽, 浪
む……「武」の草変	無, 牟, 武, 舞, 六, 夢, 霧, 務
う……「宇」の草変	宇, 有, 雲, 憂, 禹, 鳥, 羽, 卯
ゐ……「為」の草変	為, 位, 委, 井, 居, 威, 遣, 韋, 渭
の……「乃」の草変	乃, 濃, 農, 能, 野

お……「於」の草変	於, 億, 応, 隠
く……「久」の草変	久, 九, 具, 求, 救, 供, 俱, 虞, 来
や……「也」の草変	夜, 屋, 耶, 野
ま……「末」の草変	末, 万, 満, 麻, 摩, 馬, 真, 磨, 間, 漫
け……「計」の草変	希, 介, 遣, 気, 稀
ふ……「不」の草変	布, 不, 婦, 夫, 扶, 府, 赴
こ……「己」の草変	古, 胡, 許, 故, 巨, 虚, 顧, 庫, 呉, 吾, 粉
え……「衣」の草変	江, 衣, 盈, 得, 要, 縁, 兄, 依, 柄, 枝
て……「天」の草変	帝, 天, 亭, 伝, 手, 庭, 転
あ……「安」の草変	阿, 安, 悪, 愛
さ……「左」の草変	左, 散, 佐, 沙, 斜, 作, 狭, 差, 射
き……「幾」の草変	幾, 起, 貴, 支, 記, 喜, 木, 期, 季, 奇, 機, 岐
ゆ……「由」の草変	遊, 游, 由, 弓
め……「女」の草変	女, 免, 米, 面, 妻, 馬, 目
み……「美」の草変	三, 見, 美, 微, 身, 民, 弥, 味
し……「之」の草変	四, 之, 斯, 志, 師, 新, 紫, 子, 士, 寺, 事
ゑ……「恵」の草変	衛, 恵, 回, 会, 絵
ひ……「比」の草変	比, 飛, 非, 悲, 日, 避, 妣, 火
も……「毛」の草変	毛, 茂, 藻, 裳, 母, 門, 文, 模, 望
せ……「世」の草変	世, 勢, 声, 是, 瀬, 制, 西, 栖
す……「寸」の草変	須, 寸, 数, 春, 寿, 州, 巢
ん……「无」の草変	(む)の部に掲げたものを使用した。

移	伊	以	異	意	呂	日
移	伊	以	異	意	呂	日
路	樓	露	慮	婁	論	波
路	樓	露	慮	婁	論	波
八	半	盤	日	破	葉	日
八	半	盤	日	破	葉	日
頗	者	日	芳	耳	仁	二
頗	者	日	芳	耳	仁	二
尔	日	丹	兒	本	本	寶
尔	日	丹	兒	本	本	寶
報	保	日	穗	奉	遍	遍
報	保	日	穗	奉	遍	遍
邊	弊	倍	經	登	等	東
邊	弊	倍	經	登	等	東
斗	度	砥	知	地	馳	遲
斗	度	砥	知	地	馳	遲

千	致	利	里	李	離	梨
千	致	利	里	李	離	梨
理	努	怒	如	流	留	累
理	努	怒	如	流	留	累
類	遠	越	乎	平	緒	和
類	遠	越	乎	平	緒	和
王	可	歌	賀	香	我	駕
王	可	歌	賀	香	我	駕
荷	閑	家	与	夜	世	余
荷	閑	家	与	夜	世	余
代	多	日	堂	他	禮	日
代	多	日	堂	他	禮	日
連	麗	日	曾	日	楚	慶
連	麗	日	曾	日	楚	慶
所	川	都	徒	豆	津	祿
所	川	都	徒	豆	津	祿

祢 祢	柝 日	孛 年	孛 日	念 念	寤 寢	根 根
音 音	奈 奈	那 日	那 那	那 日	南 日	南 南
難 難	良 良	羅 羅	樂 樂	無 無	无 日	年 年
武 武	舞 舞	日 日	宇 宇	有 有	雲 雲	憂 憂
為 為	位 位	委 委	井 井	居 居	威 威	遺 遺
乃 乃	濃 濃	農 農	能 能	日 日	野 野	於 於
於 於	久 久	九 九	具 具	求 求	救 救	供 供
俱 俱	夜 夜	屋 屋	耶 耶	未 未	万 万	滿 滿

麻	摩	馬	真	希	介	遣
麻	摩	馬	真	希	介	遣
糸	稀	布	不	婦	夫	古
氣	稀	布	不	婦	夫	古
胡	許	故	江	衣	盈	得
胡	許	故	江	衣	盈	得
要	緣	帝	天	亭	伝	阿
要	緣	帝	天	亭	伝	阿
安	惡	左	散	佐	沙	斜
安	惡	左	散	佐	沙	斜
作	幾	日	起	貴	支	記
作	幾	日	起	貴	支	記
喜	木	期	季	遊	游	由
喜	木	期	季	遊	游	由
女	免	米	面	妻	三	見
女	免	米	面	妻	三	見

美	美	日	美	日	微	身	氏	民	之	之
四	四	斯	志	志	師	師	新	衛	衛	日
惠	惠	日	直	日	比	比	飛	日	非	非
悲	悲	日	白	日	避	避	毛	毛	日	日
毛	毛	茂	藻	藻	裳	裳	母	母	世	勢
勢	勢	聲	是	是	瀨	瀨	須	日	寸	寸
數	數	日	春	春	春	日	壽	壽		

(9) 仮名の完成と国文学

仮名の完成は、実用上にもまた文学上にも非常な便益を与えた。これが文化史上に与えた影響は甚大である。わが国民はこれによって、はじめて国語を平易簡明に、しかも正確に記述することが出来るようになった。

平安中期に於て国文学が勃興し、和歌の隆昌を來たし、純粹の国語で記述した源氏物語をはじめ多くの物語、日記、隨筆、歌集等があらわれ後世まで日本文学の華と輝いているが、これは仮名の恩恵によって生れたものと考えられ、この文学に盛られた情趣は、仮名文字なくしては絶対に表せなかったと信じられる。なお当時の仮名と文学との間には相関性があり、仮名の出現によって仮名文学が発達し、この文学の情趣をうけて、仮名の美が展開したと考うべきである。

奈良文学には、素朴、純真、豪放、遒勁の気が充ちているが、平安文学にはその多くが失われ、纖巧になり、優美になり、婉曲になり、その声調はまことに流麗で、その洗鍊された感情は他に比ぶべくもない。この趣をよくうけて独特の精華をあらわしたのが草仮名である。おおむね平安初期に於て、創成された草仮名は、平安中期に入り当時の情趣を巧みにとり入れて、連綿遊糸の草仮名の完成を見るに至った。これがいわゆる上代様仮名で、その線條は少しも渋滞することなく暢達の限りを尽し、雄勁の力を内蔵し、その形態は婉雅端麗で気品高く、字々連綿して流水の如く、繚繞宛轉、変化の妙を極めている。まことに上代様仮名は、わが国特有の世界に誇るべき文化である。

日本独自の文字である仮名を創成し、これを發達せしめて、このような文化を生み出したわれら祖先の偉業に対し、畏敬の念を更に新たにするのである。